

「御霊の一致を熱心に保ちなさい」エペソ 3：20—4：3 堀田修一 19・11・10

I 先行する神の恵みをいつも覚え感謝したい。

1. 本日の御言葉の前に神の驚くべき恵みがある→①1-3章。②3：20, 21は、神に栄光を帰す頌栄。③4：1の「さて」：原語は「ウーン」＝「そういうわけですから」の意。つまり、神が驚く恵みで救い、愛して下さっているの「ですから」。④後半の4-6章は、神の恵みへの感謝、神の恵みの命のから生まれる信仰生活、実践＝神の恵みへの応答。「その召し（神に呼びだされ、救われた恵み）にふさわしく歩みなさい」：1。⑤神の召しによる救いの恵みに相應しく歩む事の第一は、本日のみことばの「御霊による一致を熱心に保ちなさい」：2, 3。神ご自身が、私達に対して「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって耐え忍び、私達の罪を赦し、主の十字架の和解の平和の絆で、バラバラの私達を主と結びお互いを結び、主の体である教会に加え、御霊なる神による一致を与えて下さった」。この先行する神の恵みを心から感謝したい。

2. アダムとエバが神に背いて始まった罪は、神との愛の関係を分離し、分裂させた。そして、その罪は、人間同士の関係も分割させ、分離させ、分裂させる。それは、これまでの歴史と私達の神との関係と人間関係に現れている。罪は、私達の生活の中で、争いや葛藤を生み出す。それは、私達の身近な人間関係だけではなく、世界の国々の争いにも影響している。それゆえ、救いの中心的な目的は、神の背く罪と墮落が造りだした破壊、分裂以前に存在していた神と人、人と人の一致を得る為に、再び一つにし、再び共に集め、回復する事にある→「時が満ちて計画が実行に移され、天にあるもの地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです」1：10。この主にある一致は、他の事柄に優って神の栄光を現わす。

II 先行する神の驚くべき恵みを受けての私達の応答。

1. 御霊の一致とは違う一致。①相性の一致。②好みの一致。③民族的一致。④神の喜ばれる事、喜ばれない事を問わない一致。⑤聖書の教理、御言葉の教えを無視した一致。⑥人につき、主につかない一致。

2. 御霊の一致とは。①主を信じる私達の心に内住されている御霊なる神のみが産み出し、創造される一致。ですから「御霊の」一致と言われ、また一致を「作りなさい」と言われず、「保ちなさい」と言われる。私達は、御霊の一致を造り出す事はできない。御霊が、すでに生み出し創造し与えておられる一致を熱心に保つ事が私達の分。②御霊の一致、教会の一致の土台は、先に述べられたエペソ1-3章の御言葉、教理、神の恵み。この順序が大切。御言葉の正しい理解、教理、神の先行する恵みなしに、真の一致はない。真の一致を生み出し創造される御霊なる神の最大の御使命は、御言葉の真理を私達の心に教えて下さる事(1：17)。

3. 御霊の一致を妨害するもの。①悪魔は教会に間違った教えを入れたり、教会員同志を争わせ分裂させようとする。気を付けて、目を覚まして祈りたい。御言葉を正しく学び続けたい。6：10-18。②主と主の御言葉につくのではなく、人につく分派。「『私はパウロにつく』と言えば、別の人には『私はアポロに』と言う」(Iコリ3：4)。人につかず、主にしっかり結びついて、主を間においた交わりをする人は幸い。③祈りつつ、愛をもって真実に当の本人に話すのではなく、他の人々に悪口、陰口として言いふらしてしまう。事の真実は曲げられ、色々な人々の思い、感情、解釈が加わり、真実から、かけ離れたものとなる。自分が、そうされたらと考えたい。「私に、まず、話してくれたら良かったのに」と思う。謝る事も事情を説明する事も出来る。神に祈り、導きを求め、聖なる勇気と真実な愛をいただき、他の人に言いふらすのではなく、時と場所を求め、本人と交わるなら幸い。その交わりの中におられる主は和解、成長を与えてくださる！「互いに悪口を言い合ってははいけません」(ヤコブ4：11)。「あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい」4：25。

Ⅲ 御霊の一致を保つために。

1. 「御霊の一致」は、私達が造れるものではなく、すでに御霊により与えられている事を確認したい。
2. 御霊の一致の土台は、不動の御言葉、正しい教理、先行する神の救いの恵みである事を感謝したい。1-3章。
3. 教会、自分達の正しい理解、認識。教会（私達）は、完全な人々の集まりではなく、罪、弱さ、欠点の多い者の集まり。主の姿に変えられつつある、まだ途上の者の集まり。新約聖書に出て来る教会を見てみると、皆、問題、罪、戦いのある教会。だからこそ、パウロは、手紙（励まし、警告、注意）を書く必要があった。神は、私達が完全になったら愛すると言われるのではなく、不完全な教会（私達）を愛し、育て、主の御姿に変え続けて下さる。
4. 罪、弱さ、欠点、失敗の多いお互いである故に、本日の御言葉が必要。教会が完全な人々の集まりなら、互いに赦し合い、忍び合う必要はない。「謙遜と柔和の限りを尽くし」：2。「謙遜」＝自分の無力さを真に認め、神に心から抛り頼むへりくだり。神の恵みがなければ、とっくに滅んでいる事を認め感謝する心。神は、御聖霊と御言葉で私達に罪を示し、失敗や物事がうまくいかない事を通して、へりくだらされ、人々に優しく接する人に変えられる。主と人々と教会に仕える心。弟子たちの足を洗われた主からいただく謙遜。反省し、悔い、主に頼り、生活を改める心。明確な御言葉に従う。御言葉に記されていない細かな事で、自分のやり方を相手に押し付けない。祈りつつお互い語り合い聞き合い、事を決めて行く。相手の言い分を「聞く」事と自分が「語る」事のバランスのある心。健全なコミュニケーションを持てる心。「柔和」＝心の内の穏やかさ、優しさ。神にすべてを委ね、自分の願いと違う事も、受け入れる備えがある心。意見が合わない人にも優しく、良く忍び、接していく徳。これも私達が自分で生み出せるものではなく、内住の御霊なる神が生み出して下さる実（ガラテヤ5：23）。「限りを尽くし」：2＝どこにいても、いつでも、どんな人、忍耐させられる人にも、出来る限り謙遜と柔和を尽くす。それは、自分の頑張りでは無理。謙遜と柔和の主に抛り頼もう！「寛容を示し」＝寛容は、短気ではなく、相手を愛して「長く苦しむ」（寛容の原語の意）事があっても、気持ちを切らさず共に歩む。それが、寛容な主が、罪と欠点の多い私達に今日まで示し続けられている愛、寛容。感謝します！いろいろなさせるような人と接しなければならない時がある。つらい時、思い起こしたい。これも神の愛による貴重な訓練である。

Ⅳ 励まし。

もし、神が寛容な方でないなら、私達は、誰一人として今生きてはいない。世界中に一人もクリスチャンはいない事だろう。もし、神が辛抱強い方でないなら、キリスト教は存在していないだろう。しかし、主なる神は、広く、長く、高く、深い愛で、私達を愛し続けて下さる。主が今日まで、どんなに罪深く欠点、失敗の多い私達に寛容であられたかを、いつも思い起こしたい。いつも主に感謝したい！主の寛容がなければとっくに滅んでいる事実を、いつも覚えていたい！私達と私達にとって難しい人の両方を主は愛しておられる事を。主につながり寛容（自力では無理→御霊の実。ガラ5：22）を示せますように。「愛をもって互いに忍び合い」。主から愛をいただいて、互いに忍び合う。片方だけでなく、互いに。「忍び合う」とは、自分の力で我慢し、心で恨み、いつか爆発する事とは違う。互いに支配しない、支配されない。互いに語り、互いに聞く（気持ちも）。互いに努力しても、すぐには良くならない所を、互いに忍び合い、主が、まず、私自身を変えて下さるように祈り合う。相手の意見と違って、相手の人格を受け入れることが出来るように。相手を理解する事に心を使うことが出来ますように。ある人は、何か問題があり、いらいらしているかもしれない。体調が悪いのかもしれない。あなたは、恵みのみことばを聞く機会があったが、その人はなかったかもしれない。主が十字架の苦しみ、贖いで生み出された真の「平和の絆で結ばれて」御霊の一致を熱心に保てますように！